

霧島山（新燃岳）の火山活動解説資料

福岡管区气象台
火山監視・情報センター
鹿児島地方气象台

＜火口周辺警報（噴火警戒レベル 3、入山規制）が継続＞

本日（5月31日）午前、海上自衛隊の協力を得て行った上空からの調査では、火口内に蓄積された溶岩は、火口内の様子を確認できた5月13日と比較して大きな変化はありませんでした。

4月18日19時22分の噴火以降、噴火は発生していません。

【防災上の警戒事項等】

新燃岳火口から概ね3kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石や火砕流に警戒が必要です。

風下側では降灰及び遠方でも風に流されて降る小さな噴石（火山れき）に注意が必要です。これまでの噴火では、風に流されて直径4cm程度の小さな噴石（火山れき）が新燃岳火口から10kmを超えて降りました。また、爆発的噴火に伴う大きな空振に注意が必要です。噴火警報等及び霧島山上空の風情報に注意してください。

降雨時には泥流や土石流に警戒が必要です。降雨に関する情報に注意してください。

○活動概況

・上空からの調査（図1、2）

本日（5月31日）、海上自衛隊第72航空隊鹿屋航空分遣隊の協力を得て行った上空からの調査では、火口内に蓄積された溶岩は、火口内の様子を確認できた5月13日と比較して大きな変化はありませんでした。白色噴煙は、主に火口縁辺の南東側から火口縁上100m程度上がり、南東に流れていました。

赤外熱映像装置¹⁾による観測では、前回（5月17日）と比較して地表面温度分布に大きな変化はなく、火口内に蓄積された溶岩の縁辺が高温でした。

・地殻変動及び地震・微動の発生状況（図3）

傾斜計では、火山活動に伴う大きな変化はありませんでした。

火山性地震は、増減を繰り返しながらやや多い状態で経過しました。火山性微動は、時々発生しました。

1) 赤外熱映像装置は物体が放射する赤外線を検知して温度分布を測定する測器です。熱源から離れた場所から測定することができる利点がありますが、測定距離や大気等の影響で実際の熱源の温度よりも低く測定される場合があります。

この火山活動解説資料は福岡管区气象台ホームページ (<http://www.jma-net.go.jp/fukuoka/>) や気象庁ホームページ (<http://www.seisvol.kishou.go.jp/tokyo/volcano.html>) でも閲覧することができます。



図 1 霧島山（新燃岳） 火口内の状況

- ・ 火口内に蓄積された溶岩に大きな変化はありませんでした。
- ・ 白色噴煙は、主に南東側（図中の白丸）から火口縁上 100m 程度上がり南東に流れていました。

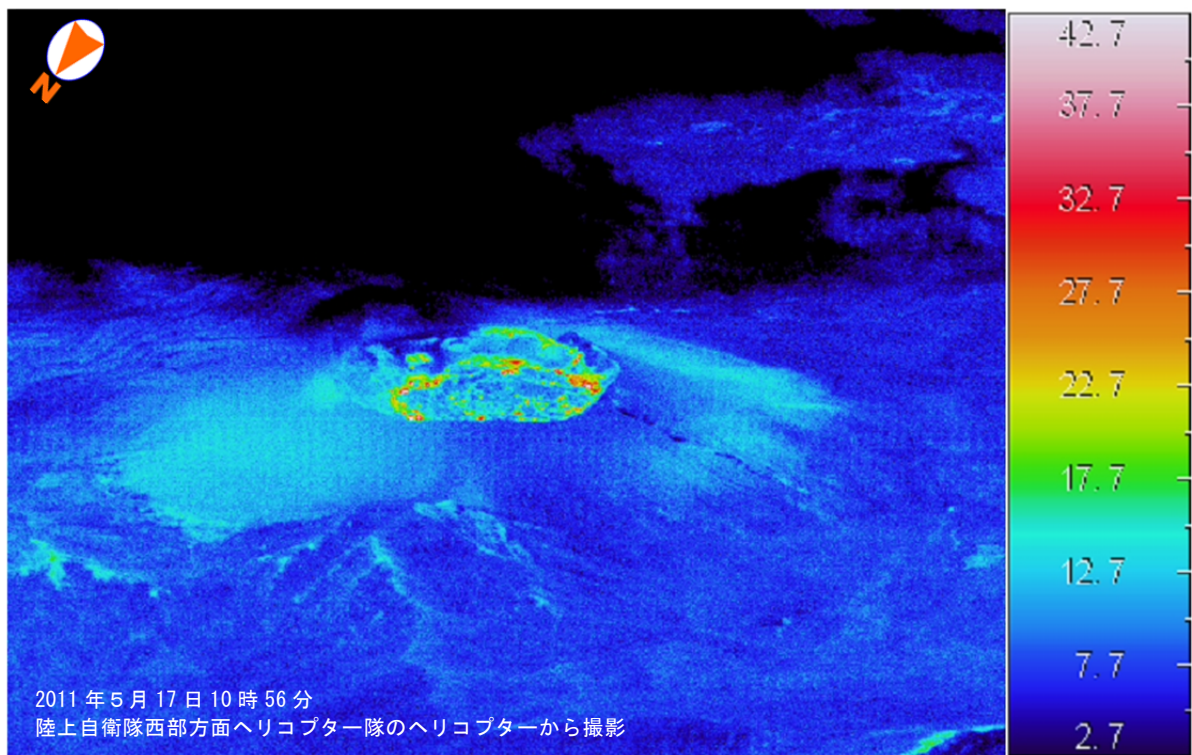
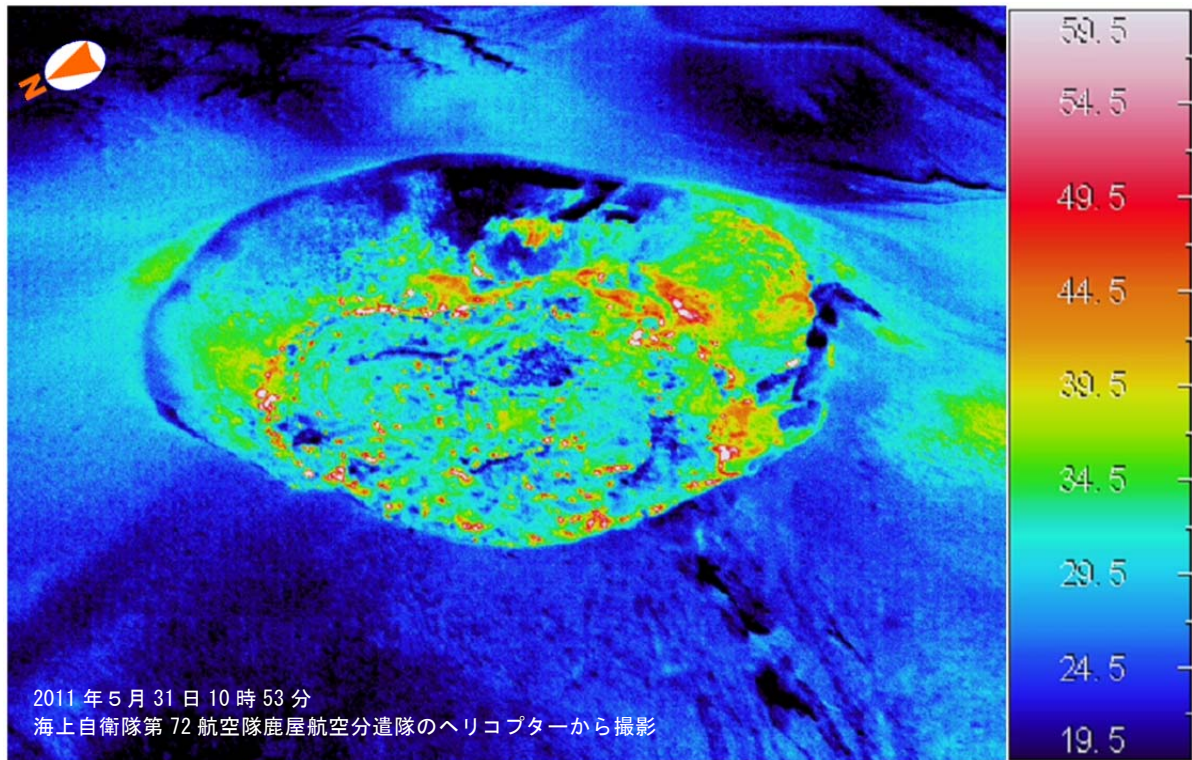


図2 霧島山（新燃岳） 赤外熱映像装置による火口付近の地表面温度分布

赤外熱映像装置による観測では、前回（5月17日）と比較して地表面温度分布に大きな変化はなく、火口内に蓄積された溶岩の縁辺が高温でした。

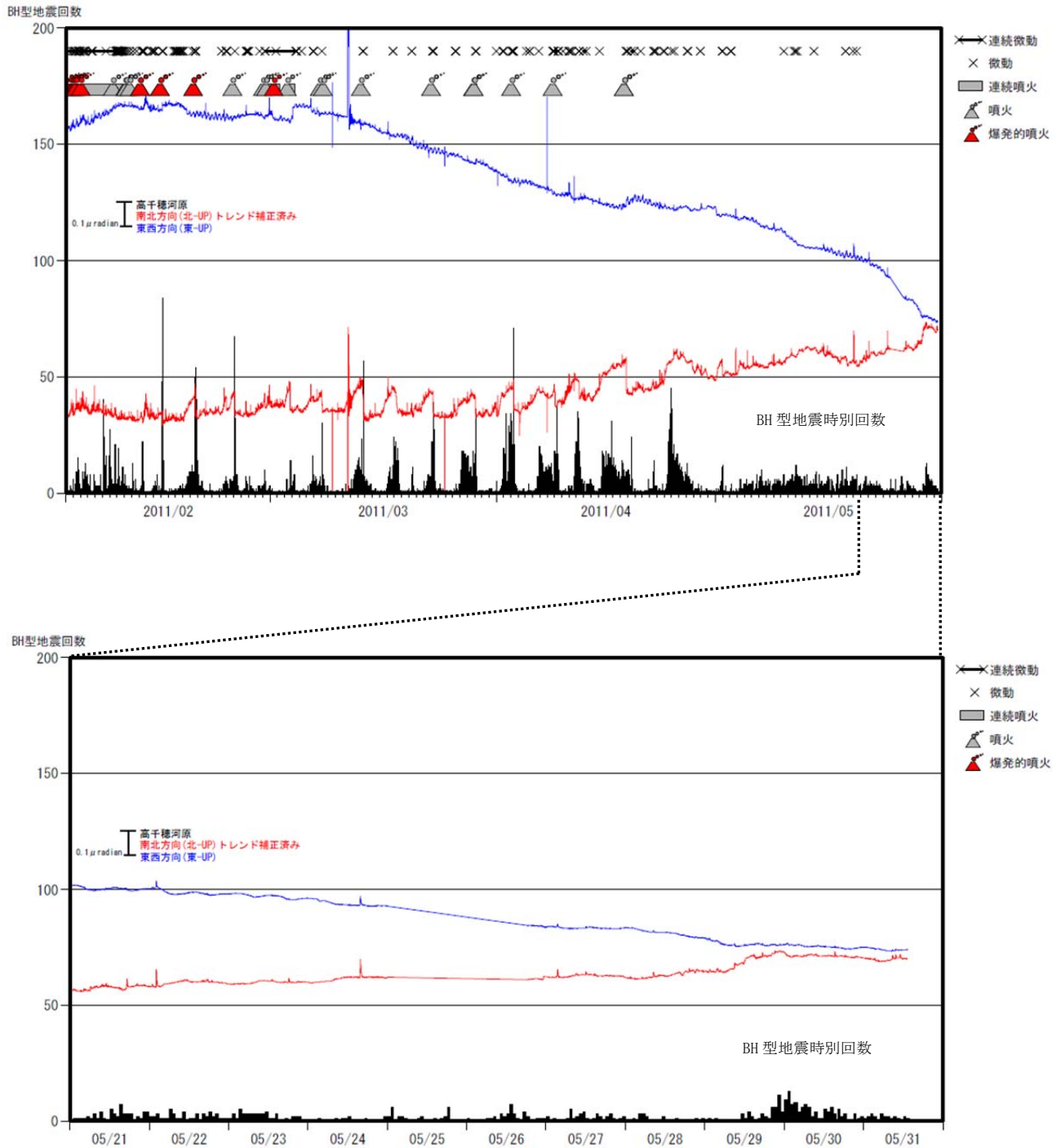


図3 霧島山（新燃岳） BH型地震²⁾の時間別回数と高千穂河原傾斜計の変化
(2011年2月1日00時00分～5月31日14時00分)
火山活動に伴う大きな変化はありませんでした。

2) 火山性地震のうち、火口直下の比較的浅い場所で発生し、周期の長い地震をB型地震と呼びます。B型地震は、マグマの通り道（火道）の中で、マグマやガスが移動したり、マグマが発泡したりすることで発生すると推定されています。B型地震のうち、比較的周期が短いものをBH型、長いものをBL型と分類しています。